

平成30年 9月 1日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370369

研究課題名(和文) 語り得ぬものの言語論 18世紀ドイツ語圏における「沈黙」の系譜

研究課題名(英文) The Genealogy of 'Silence' in the German-Speaking Area of the 18th Century

研究代表者

宮谷 尚実 (Miyatani, Naomi)

国立音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：40386503

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、18世紀ドイツの著作における「沈黙」の意義を考察した。言語をめぐる言説のなかではヘルダーの『言語起源論』をおもに扱い、さらにヘルダーが同時期に著した音楽作品にも着目し、その思想的系譜を辿りつつ「沈黙」の諸相を分析した。その結果、言語の起源と不可分な沈黙、また言語として「語り得ない」沈黙の表現を抽出することができた。 に関しては、ルターやハーマンからの系譜を明らかにすることができた。 については、オリジナル手稿の文献学的調査を行うことにより、印刷された資料のみを用いた研究では得られない知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project aims at analysing the significance of 'silence' in the German literature of the 18th Century. It deals with J. G. Herder's "Treatise on the Origin of Language" (1772) and another of his works "The Infancy of Jesus" written at approximately the same time. These works explore various aspects of 'silence' and its philosophical genealogy. As a result, this project was able to extract the significance of "silence" as an indispensable element of the language and its stylistic expression.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：言語論 沈黙論 ヘルダー 言語起源論 ハーマン

1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀ヨーロッパの言語論に関しては膨大な研究や知の蓄積があるが、言語と対置される「沈黙」に関しては、とくに言語との関連での注目は充分になされてこなかった。神秘主義との関連で沈黙が言及されることはあっても、たとえば哲学事典(*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 8, 1992)の「沈黙」に関する項目で「G. ヴィーゴ、J. G. ハーマン、J. G. ヘルダーおよび W. v. フンボルトら近代の偉大な言語思想家たちには、沈黙というテーマについて哲学的関連での論述が見られない」と記されている。ハーマンの影響を受けたキルケゴールが「沈黙の思想家」と称され、ベンヤミンやハイデガーも「沈黙」にそれぞれの言語論から関心を向けていることを考慮すれば、18世紀から19世紀にかけての空白期間はむしろ不自然とも言える。以上のことから、18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパにおける「沈黙」概念に関する研究はまだ開拓の余地があると考えた。

(2) 研究代表者はこれまで18世紀ドイツ語圏における言語論の系譜を研究してきた。とくにハーマンにおける言語と翻訳概念、なかでも、その後ヘルダーにも繋がっていく「メンタル翻訳(Mentalübersetzung)」という概念に関する考察をおこなったことで、言語として語り得ないもの、沈黙における言語という切り口に注目することになった。

(3) この「沈黙」というテーマは日独文化比較の点からも意義があると考え、単なる言語がない状態としての「沈黙」ではなく、語り得ないものとしての「沈黙」を考察の中心に据えることに至った。

2. 研究の目的

本研究は、従来の言語思想史記述における「沈黙」の系譜における空白を埋め、言語思想史全体に新たな視座を提供することを目的とした研究である。

沈黙とは、一般的に「口をきかないでいること。だまりこむこと」などの無音状態を指す。沈黙が、言語が存在しない状態であるならば、そもそも言語学の考察の対象から外されるだろうし、社会学やコミュニケーション論的文脈では本来あるべき言語を奪い取られたり抑圧によって発言を禁止されたりした状態、あるいは発話者が言語を発することをあえて拒否している状態としてむしろ否定的にとらえられることが多い。日本語には、余計なことを言うよりも黙っている方が賢明であるという意味で「沈黙は金なり」という言い回しがあるものの、欧米に行けば沈黙とは何も理解しておらず意見もない状態ととられることがしばしばある。とはいえ、言語という水脈にはかならず沈黙が寄り添っている。それは、音楽において発生の前に沈

黙が、楽譜の中に休符があるのと同様である。本研究では「言語/非言語」としての「沈黙」や、言語を中心としてそれをとりまく(para-)「パラ言語」としての「沈黙」ではなく、言語の生まれくるいわば土壌としての沈黙を浮き彫りにすることを目指した。

3. 研究の方法

18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏言語思想史における「沈黙」の意義をおもにハーマン、ヘルダー、W. v. フンボルトにおける言語起源論に関する著作を通して研究した。その際、理論的なアプローチだけではなく、文献学的アプローチを重視し、以下の5点を解明すべく、ドイツでの文献調査や専門家との意見交換をしつつ研究を進めた。

(1) ヘルダーの『言語起源論』および、ハーマンによるいわゆる「ヘルダー文書」等を研究対象とし、まずハーマンに関する「沈黙」の諸相とその積極的な意味を明らかにする。初期の「ロンドン文書」に始まり、著作集『愛言学者の十字軍行』、その中でも「美学提要」、さらに言語起源論関連の著作を経て後期の著作にわたる言語観に関わる文献学的再調査、および文体論的分析を行う。従来のハーマン研究で「沈黙」概念への注目がなされてこなかったため、初版本やさまざまな版との比較でこれまで見落とされてきた情報を丹念に調査・吟味する。その際、ルターの詩編講義における「沈黙」の概念との関連に着目し、ハーマンにおける聖書解釈やルターの著作に関する言及において「沈黙」に関連する概念がどのように表れているかを調査する。

(2) 古典修辞学から現代言語思想に至る「沈黙」の系譜の枠組みを再構築する作業に着手し、特に「沈黙」をその語源に持つ神秘思想とハーマンらとの相違点を明らかにする。

(3) 解釈学および翻訳学の文脈における「沈黙」の役割と意味を明らかにし、特に18世紀ドイツ語圏の「沈黙」理解との影響関係やその後の「沈黙」との対峙や解釈の取り組みを明らかにする。

(4) 詩作品、特に18世紀から19世紀のドイツ文学をモデルとしたケース・スタディーを行う。特に詩作品における「中間休止」に着目し、その「沈黙」が日本語に翻訳されるプロセスでどのように処理されてきたか、あるいは翻訳されなかった場合の問題点を明らかにする。

(5) 特に現代日本の言語論における「沈黙」の意義を明らかにする。日本の「間」の文化(たとえば剣持武彦『「間」の日本文化』1992年)における日本文化における言語の「間」としての「沈黙」の意義も視野に入れ、吉本隆明『言語芸術論』に関する講演(2008年)で示された「沈黙」理解に注目し、当該年度までに明らかになった18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏言語思想における「沈黙」との比較対照を行い、「沈黙」の持ちう

る現代的意義を示す。

4. 研究成果

平成 25 年度から 29 年度の 5 年間にわたる研究のおもな成果は以下の 4 点にまとめられる。

(1) 沈黙論の系譜をたどるための素材として、聖書のなかの詩編にみられる 2 つの「沈黙」に着目した結果、15 世紀のマルティン・ルターとその影響を強く受けた 18 世紀のハーマンの解釈の違いが明らかになった。まず、両者とも、沈黙をたんなる言語のない空虚や無音とみなすことはしない。ルターは、聖霊が働く場としてとらえており、その点では沈黙する人間が受動的な存在として理解されるが、それにたいしてハーマンにおいて沈黙は人間の側に「へりくだる神」の語りかける声、あるいは心の声に傾聴する場である。したがってハーマンにおいて沈黙は、神秘思想のような観照ではなく、神からの語りかけを前提とした人間の積極的行為である。また、詩編における記号「セラ」が休止や沈黙を指示することに注目したことが、下記((3)および(4)の研究成果へと発展した。

(2) ハーマンにおける沈黙をさらに研究すると、彼が「語り得ないもの」に関して肯定的な評価をしていたことがさまざまな著作や記述から明らかになった。「言語」ではない要素を文字から排除しようとする正書法の動きに対し、言語ではない「息」としての字母 h を弁護する著作『字母 h 自身の新たな弁明』(1773 年)や「メンタル翻訳」という概念は代表的な例であるが、その他にも「深さ」や「密接さ」という概念から、ハーマンにおける「沈黙」の意義が明らかになった。

(3) ヘルダー『言語起源論』(1772 年初版)は人間による言語の発明(Erfindung)に関する著作であるが、この著作のなかで 3 種類の「沈黙」が存在することが明らかになった。(1)でハーマンに見られたのと類似する a) 聴取のための受動的沈黙、b) 思考のための能動的沈黙、c) 沈黙をあらわす記号としてのダッシュである。特に、人間による言語の発明の叙述直前に用いられたダッシュ記号は象徴的である。ところが、ヘルダーの原著には明らかに使用されたこの沈黙の記号は、これまで 2 種類出版されていた日本語訳(いずれも 1972 年)で完全に省略されたり、説明的な語が追加されたりすることでその効果を失ってしまっていたことも明らかになった。そこでさらに記号によって表現されていた「沈黙」とその翻訳可能性という問題も浮き彫りになった。また、この著作のなかでは思慮深さ(Besonnenheit)という概念が用いられている。この「思慮深さ」とは、言語が生まれる以前に言語を発明するための能力として人間に備わっていたとヘルダーは述

べる。そうであれば、この思慮深さとは言語以前の「語り得ぬもの」の領域に位置づけられるべきものである。また、『言語起源論』の翻訳に際し、ベルリンの国立図書館手稿部門などでこの著作の自筆稿の諸段階を調査したことから、句読点や記号の用い方にそれぞれの稿で揺れがあることが確認できた。草稿を実際に手にしたゲーテなど同時代人や現代でもネイティブの読者であれば問題なく「語り得ないもの」として認識でき、句読点が存在してもしなくても影響ない部分で特にこの揺れが見られる。しかし翻訳の際にはコンマひとつがあるかどうかで訳文が変わりうる。この新たな知見から新訳ができたことは本研究の大きな成果だった。

(4)『言語起源論』が出版されるのと同時期にヘルダーは宗教音楽のための詩作品を書いている。それが、のちに J. S. バッハの息子が付曲したオラトリオ《幼子イエス》(1773 初演)である。ここでも、(1)の詩編における「セラ」のように、あるいは(3)の『言語起源論』におけるダッシュのように、「語り得ない」感情があふれる沈黙においてダッシュが多用されていることが、やはりベルリンの国立図書館手稿部門に所蔵されている手稿の諸段階の調査から細部にわたって明らかになった。当時、ドイツ語圏の多感主義文学にも大きな影響を及ぼしたイギリス文学からの影響が考えられる。このダッシュの機能はいくつにも分類されうる。さらに、ダッシュ以外にも類似の感情を表現するための「沈黙記号」があることも明らかになった。この記号は印刷された全集版では反映されていないので、「語り得ないもの」の表現手段に関するケース・スタディーの成果として重要だと考えられる。

今後は、本研究から得られた知見をもとに、以下 2 つのテーマで研究を進める。

- 1) 18 世紀の句読法を中心とした、音とその記述の関連に関する研究
- 2) Besonnenheit 概念を中心とした、知の営みのうち「語り得ない」側面としての思考と言語の関連に関する研究

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

宮谷尚実:「言語と音楽のはざままで - ヘルダー《幼子イエス》における沈黙の記号を例として-」、『国立音楽大学研究紀要』(査読無)第 52 集、2018、173-181

MIYATANI, Naomi: Textkritische Untersuchung zu Herders Weihnachts-‘Cantate’ „Die Kindheit Jesu” -

Schweigezeichen als Ausdrucksmittel der Empfindung?、*Neue Beiträge zur Germanistik*(査読有) Bd. 16 / Heft 1、2017、183-197

宮谷尚実：「言語起源論における沈黙 - ヘルダー『言語起源論』の場合」、『国立音楽大学研究紀要』(査読無) 第 50 集、2016、193-199

MIYATANI, Naomi、Schweigen als Ursprung der Sprache bei J. G. Hamann、*Neue Beiträge zur Germanistik* (査読有) Bd. 13 / Heft 1、2014、113-126

宮谷尚実：「詩編第 4 編第 5 節における「沈黙」の意味 - ルターとハーマンの場合」、『国立音楽大学研究紀要』(査読無) 第 48 集、2014、145-149

〔学会発表〕(計 0 件)

ただし、ドイツ(ベルリン自由大学およびトリアー大学)における招待学術講演計 2 件あり

〔図書〕(計 1 件)

宮谷尚実：講談社、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー著『言語起源論』(翻訳・訳注・解説) 2017、233

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮谷 尚実 (MIYATANI, Naomi)

国立音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：40386503

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()